

真宗寺

# 寺報 竹の子



平成二十八年第一号

## 住職挨拶

あらためまして、寺族を代表しまして本年も宜しくお願い致します。本年は前住職の七回忌・前々住職の二十三回忌・前々坊守の七回忌を六月にお寺で寺族と親戚にて厳修する予定であります。法事とは回忌のあたっている仏様のお参りだけでなく、回忌があたっている仏様からご縁を頂き、他の仏様（御先祖様）方と今の私を支えてくれている家族にもお参り・感謝させて頂く場であります。ですから今回のご法事では先代・先々代住職からご縁を頂き、真宗寺のご本尊（阿弥陀如来）様を守ってこられた歴代のお檀家（皆様の御先祖様方）と歴代住職とその寺族、そして今、真宗寺を法灯・護持して頂いているお檀家の皆様に感謝する念佛の場として今の私の家族（寺族）と共にお参りさせて頂きます。

長崎山 真宗寺 第二十六世 住職 長崎 寿秀

## 親鸞聖人と戒律

仏教の戒はサンスクリット語では「シーラ」といい、「習慣性」を意味するものです。戒は、キリスト教に見られる創造主である絶対者（神）からの命令と異なり、「〜してはならず」という道徳的禁止命令の意味ではなく、理論的にいえば「われとせず」という積極的意識を意味しています。

仏教の「不殺生戒」は、モーゼの十戒の「殺すなかれ」（人殺しの禁止）と異なり、生きとし生けるもののいのちを無駄に殺さない習慣を自律的に身につけようとするものです。この背景から食事の際に「生きとし生けるもののいのちを決して無駄にはしません」と自覚し、合掌しながら「いのち」を摂取し、「いただきます」と戒めがあつてはじめて感謝に転ずる食習慣が生まれました。

実は精進料理は中国で生まれ、日本に伝わったもので釈尊が唱えたものではありません。釈尊は信者より施された食物については、分別なくその布施の精神を尊重して頂いておりました。（豚肉を施されて死に至った説もある）そもそも精進料理には、植物と動物の「いのち」を区別する考え方があり、既に仏教の精神から逸脱しているのです。

出家者や俗人に限らず、仏の功德を分かち与えるという意味が強かった大乘仏教は、在家の為の仏教でもあります。その在家に与えられたのが罰則のない、規則正しい生活を守る、生活習慣な様式的意味が「戒」です。

一方の「律」は、出家者の集団の秩序を乱す者に与える罰則の規程を意味します。基本的には、在家信者も出家者も戒を破った時には「懺悔」しますが、戒は守り切るものでなく、糾弾するものでもなく、許されるものが「戒」なのです。親鸞聖人においては、内なる自己の罪障性（戒め）によつて無条件に仏の願いの無限性に救われてゆく体現をされました。親鸞聖人は、自ら阿弥陀仏の本意を受容しており、この体現の前提には教信沙弥の存在があります。

教信は法相宗、興福寺の優れた学匠で、回心の後西方浄土を願い、賀古の草庵に妻子と共に住み、昼夜に念仏を唱え夢の中にまで称名した捨て聖でありました。教信は髪も爪も切らず、衣も袈裟も掛けず、托鉢もせず農民の手伝いをしながら生きていたのです。また、仏像も経典類にも執着せず、死後は鳥に自分の屍体を食べさせたそうです。沙弥すなわち求道者たる教信は、村人に阿弥陀丸と呼ばれた無名の聖であったのです。〔十因〕

親鸞聖人は「我は是れ賀古の教信沙弥の定なり」と言い、「某 親鸞閉眼せば、賀茂川にいでて魚にあたうべし」『改邪鈔』と言ひ残したとされ、無名の非僧非俗の念仏者として沙弥像を生きたことがわかります。越後に流罪された親鸞にとつて、貧困や災害、飢饉に苦しむ農民と共に生き、死んで往ける場所にある救済こそが真実の世界を映す鏡であつたのでしよう。

仏教の戒律と非常に似ており、「不殺生」の立場を強調する宗教にジャイナ教があります。ジャイナ教は、仏教と同様にバラモン教を源流に持ち、不殺生を維持する為、仏教とは異なり、世俗の信者に対しても生き物を殺すことに繋がる労働を禁じていました。このジャイナ教の立場は、持戒仏教の僧侶と同様に、勤

勞を罪として禁じ、無為徒食を貫き、犯罪を最小限に抑制しています。しかしその反面、バラモン教の信仰を取り入れ、カースト制度を認めているのです。

松野純孝はこの立場に対し、「人間の生産活動を禁止することは、人間を殺すことでもある。自分たちだけ、手を汚さないで、他の人たちに殺生の生産活動をさせ、そうした他人の犠牲のうえで、知らん顔をして、自分の生命をつないでいくというのであろうか。そうとすれば、不殺生に努め、犯罪最低といった輝かしさも、けつきよくは、偽善といわれても仕方がないのではないか。もっと、本質にそくして考える必要があるのではないであらうか」と提言しています。『親鸞の開眼』(1973年) 松野が提言した本質とは、人間の自然原理に即した求道のあり方を示していると考えられます。もともと肉食を主としていたインドに侵食した遊牧民アーリア人は、支配力を強化し、その聖性を高めるために、肉食主義となり、牛をシンボルとして、その屠畜を禁止し、肉食を禁忌化して自らを神格化していったのです。聖なる征服者は、性交・死・出産・経血・排泄行為という生命現理に対し、「穢れ」の徴として排除し、カーストという差別を生みました。

バラモンが全盛だった時代、釈尊は、バラモンの権威を否定し、厳格な戒律と心身の苦行によって神と一体化することで真の悟りに達するバラモンの実践と差別を否定し、中道を説いたのです。

釈尊は、生まれや姓に限らず(四姓平等)〈万人成仏〉を説きました。しかし、当時バラモン教が全盛の頃であり、カースト内外の信者を多く抱える立場上、一定の「秩序性」を保持した上で教えを強化するために必要な「戒律」が必要であったのです。戒律を保持し、血統より行為の正しさを証明する意図があったのでしよう。この為、釈尊は涅槃に入る際、ある程度仏法・ダンマの「本質」が理解された状況を見立て、「少々の戒律箇条は廢して良い」と言ったと考えられます。

親鸞聖人は、殺生を生きたるための生業としていた人たち(漁師、漁民、屠児)、と一緒に、イデオロギー操作を原初に持つ、与えられただけの戒律や差別支配に縛られることのない根源的本質に目覚めていった凡夫でありました。親鸞聖人が、修行僧の頃、北条家に招かれた一切経の校合の後の酒宴の際、当時九歳の北条時頼から、他の僧侶は魚肉を食べる時袈裟を脱いで食べているのに貴方だけなぜ脱がないのかと尋ねられ、生き物のいのちを頂き深い感謝と成仏を願う為、袈裟は

諸仏の悟りを示す商識だと答えたそうです。

権威構造を持つ比叡山で二十五年間戒律を体現した親鸞聖人の沙弥として示された生き方には、人間の根本的生命現象に寄り添う姿が映し出されます。そして、人間をいくら聖性化しても、そこに驕慢な差別意識があることを気づかせてくれます。 合掌 安部直広

### ■真宗寺年間行事のご案内

#### 定例開法会

三月二十五日(金)、五月二十五日(水)、  
六月二十五日(土)、七月二十五日(月)、  
八月二十五日(木)、十月二十五日(火)、  
毎月午前十時半より

※本堂にて講師の先生より毎月二十五日に皆様へ親鸞聖人の教えを分かりやすくお話しして下さる会です。

#### 声明会

三月二十五日(金)、五月二十五日(水)、  
六月二十五日(土)、七月二十五日(月)、  
八月二十五日(木)、十月二十五日(火)、  
毎月午後一時時より

※住職が皆様にお経を分かりやすく説明し、一緒に声を出しながら触れ合う会です。

#### 蓮如忌法要

四月二十五日(月) 十時より

#### 住職の怪談話と

肝試し 八月お盆以降に予定 午後六時より 会場お寺にて

#### 秋彼岸法要

九月二十二日(木) 十時半より

#### 報恩講

十一月十一日(金) 十時より

#### 除夜の鐘つき

※無雑お雑煮焼出があります。  
十二月三十一日(木) 十一時四十五分頃より